

# 「書き方」はどのように学ばれてきたのか

## —教科書としての往来物の編纂と文体の問題—

磯貝 淳一

### 一、日本語学における和化漢文研究

#### —自己紹介を兼ねて、私の立場—

#### ① タイトルの意味するところ

私の主たる研究テーマである和化漢文資料に基づく日本語史研究についてお話しします。タイトルにある「教科書」とは、ここでは古代に出現する往来物の「初等用の文範集」という性格に基づく呼称です。この度は、教育学部の学生の皆さんも多く参加して下さっていますので、特に、近年取り組んでいる古往来『東山往来』の文章を取り上げて、言語事象(事柄)の解明と当時の言語生活を視野に入れた文章の位置づけ(価値)との関わりについて、教科書(教材)とそれを用いて教える内容との関係に重ね合わせつつ、将来教員になるであろう皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

#### ② 学問と日常の接点

私は日本語史の研究において、用語や用字の実態、またその先にある文体の問題を通して、日本人の思考の有り様とその変遷を捉えたいと考えています。日本語の歴史は、奈良時代に〇〇であった日本語が次の平安時代には〇〇になった、というような事柄

的な知識として伝達されることも多いかもしれませんが、それはこの問いに答えたことにはなりません。授業においても、学習者が自身のこととして日本語の歴史に向き合うこともないでしょう。研究者には、専門分野の内容に対する深い理解と洞察の力が必要であることは確かなのですが、授業を前提にすれば、学習者の日常言語(思考)を「学問の俎上」に乗せるための研究上の視点が大切だと考えています。「書くこと」の問題について、漢字・漢文の伝来以降、自身の思考を伝統的な日本語(和語)の枠組みとは異なる方法で実現しなければならなかった、日本人の「書きなさ(と書くための工夫)」の歴史であるという観点を設定してみよう。このことで、日々の論文・レポートに対して「書きなさ」を感じている学習者は、「書きなさ」と苦闘してきた歴史上の書き手の悩みや工夫を体験的に発見することができるようになるかもしれません。例えば、接続詞の使い方に悩む学習者の問題は、すでに過去において日本人が工夫を重ねてきた日本語の歴史に重ね合わせられる可能性があるのです。

研究における専門性は、こういった学習者の日常言語(思考)を「学問の俎上」に乗せるために発揮される側面も重要であると

というのが私の考え方です。

### ③ 和化漢文研究の流れ

「和化漢文」とは、大きくは「漢字専用文であって、中国古典の文章に準拠した正格の漢文には見られない言語上の特性（日本語の表出）が認められるもの。」とされます。その研究領域・方法は多岐に涉りますが、基本的には漢字表記の背後にある日本語を厳密に再現しようとするところから研究が始まります。漢字漢文はどのような日本語で読まれるべきなのか、それが分らないことには、「どの時代の」「どの人々の」日本語かを決定することもできませんから、このような「表記」に基づいて和化漢文を捉える日本語研究は重要な方法だと言えます。しかし、特に漢字文献を扱う場合、一字一字に厳密に日本語を対応させる「表記」を軸に行い得る分析には限界があるのではないのでしょうか。例えば、今回取り上げるような文章の「述べ方」の問題は、和化漢文をまた別の観点から位置づける必要性を感じさせるものです。

## 二・日本語書記史研究の一視点

### ① 往来物の展開と『東山往来』の位置づけ

往来物とは、主に寺子屋で使用された「初等」用の教科書の総称です。特に中古・中世に作成されたものは、古往来と称され古くは往状・返状の往復一对の手紙を模範文として収載して手本として編んだとされます。今回取り上げる『東山往来』（高野山大学図書館蔵応永十一年写）は、分類上「明衡往来型」とされますが、この型は「文例集たる古往来の中でも最も早く成立した類型であって、（中略）きわめて簡單・素朴な編集ぶり」とされます。

（石川謙（一九六八））その後の往来物が、個別の事例を学ぶものから汎用的学力の涵養へと変遷していったとされることから見ても、往来物の原初的な姿の一つであるという訳です。しかし、『東山往来』は、他の古往来にはない独自の文章様式を持っています。それは、本資料序文に東山の師僧と西洛の檀主とが互いに交わした書簡を、中間に居た「余」が拾い集めて一書とした、と述べられるように、「質問する者と答えて教える者、檀那と師僧、の二極を立ててかかった。」「問う者と教える者との両極を立てて、そこに百科的知識をもちこんだ」（石川（一九六八））言わば往復で問答を取り交わした形式が全編を貫いている点です。

古往来は、これまでも用語・用字などの言語事象から、また寺院や公家といった成立文化圏の問題からその特徴が明らかにされてきました。しかし、先にお話ししたような「書くこと」「書けなさ」「学び」といったキーワードからこの資料を見た場合、『東山往来』の特徴はどのように記述され、またこれを用いた学習者達には、どのような学びがあったのでしょうか。

この点について私は、次のように考えています。まずは、形式・内容面からは、往復の書簡による様々な質問と答えの集成。学習者は、当時一般の所謂百科的知識を、具体例に基づいて学ぶことができず。

○「形式」は書簡文（往状・返状の文章は、通常の書簡文とは異なり、日付・宛所の省略等も多くある。）

○「内容」は百科的知識

檀主の日常的な疑問／困り事【往状】

師僧の知識の提供【返状】

ただし、『東山往来』の文章は、単純な往復書簡の集成という性質を超えた一面も持っているようです。例えば、往―復の書簡は、二つの文章というよりは、往復一セットの問答体の文章と見ることもできるのです。(この「一セット」という考え方は、往状(質問)は、檀主である俗家が書いているはずなのですが、そこに仏家的な書き方の特徴が認められること、つまり答える側の師僧が、問いの文章(往状)作成に関わっていた可能性があることから補強することができます。)

○「文章構造」は問答体

- 1 時候の挨拶(往状①)
- 2 自らの疑念に関する状況の説明(往状②)
- 3 説明を受けて問いを立てる(往状③)
- 4 答え(結論)を述べる(返状①)
- 5 論拠を示す(返状②)

つまり、『東山往来』が百科的知識の伝達を目指す一方、問―答の形式を重ねる文章ともなっており、学び手はこのような問答の述べ方や考え方の論理構造を学んでいた、とも考えられるのではないでしょう。

② 書簡文体か注釈文体か

以上見たような文章の特徴は、『東山往来』独自のものというよりは、この文章成立当時の書き手、特に僧侶達の文章生活を背景として成り立っているものではないかと考えられます。それは例えば、仏典や仏教の教義に対する僧侶の学習に伴って制作された文章、当該期にあつては殆どが漢文体によるものですが、そこには、『東山往来』に見るような問答体の形式を用いるものも多

く、用字・用語も両者には共通的な特徴が認められます。『東山往来』の文章は、書簡文体の形を借りつつも、内実は注釈文体と言うべきものなのかもしれません。

三. 所謂教科書「で」何を学んだのか

教科書「を」学ぶのか、教科書「で」学ぶのか。よく提起される問題ですが、まとめとして、私は『東山往来』の文体特徴の解明と、この問いを次のように重ね合わせて考えたいと思います。

① 『東山往来』の文体特徴と学びの側面

『東山往来』の文章は、百科的知識の伝達・書簡文の書き方の手本を目指すものとなっている。(Ⅱ「を学ぶ」)また同時に、論理的な構造を持つ文章、論理的な考え方や問いの立て方、論証の仕方のひな型ともなっている。(Ⅱ「で学ぶ」)

② 古典教材分析における可能性

このような考え方によつて、日本語史研究と国語教育との連携が図られる側面があるのではないのでしょうか。学習者がどのような「書くこと」の力を伸ばしていくのか、そのプロセスと日本語書記史の展開とを結びつける可能性を探ること、これが現在私が取り組んでいる研究の一つです。古代の書き手の「書き方」の様相、変遷を知ること、例えばこれまで古典の授業において「読むこと」の対象であった古文を、学習者自身の「書くこと」を自覚的に学んでいく教材として位置付けていくことができるかもしれません。

【参考文献】石川謙(一九六八)『日本教科書大系』往来編第一巻古往来(一)解説